

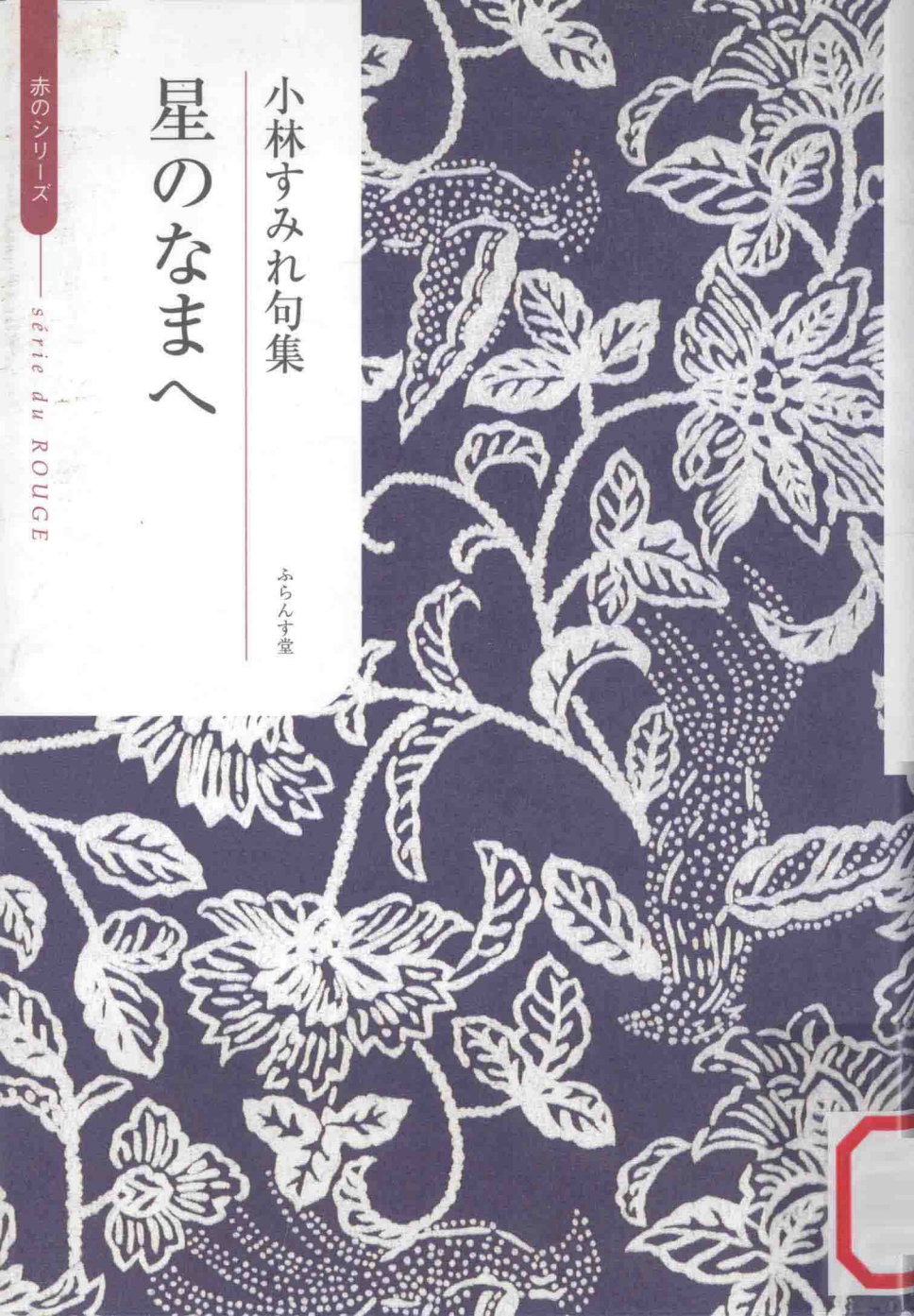
赤のシリーズ

— série du ROUGE

星のなまへ

小林すみれ句集

ふらんす堂



赤のシリーズ

— série du ROUGE

小林すみれ句集

星のなまへ

ふらんす堂



ふらんす堂俳句叢書
Série du rouge

句集 星のなまへ ほしのなまえ 棕叢書16

二〇一五年七月七日 第二刷

定価 本体二八〇〇円＋税

● 著者 小林すみれ

● 発行者 山岡喜美子

● 発行所 ふらんす堂

〒一八二—〇〇〇二 東京都調布市仙川町一—一五—三八—二F

TEL 〇三・二三二六・九〇六一 FAX 〇三・二三二六・六九一九

ホームページ <http://furansudo.com/> E-mail info@furansudo.com

● 装幀 和 兎

● 印刷 株式会社トヨー社

● 製本 株式会社松岳社

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN978-4-7814-0782-1 C0092 ¥2800E

序・石田郷子

I	二〇〇五年～二〇〇七年	13
II	二〇〇八年	35
III	二〇〇九年	57
IV	二〇一〇年	85
V	二〇一一年	107
VI	二〇一二年	123
VII	二〇一三年	145
VIII	二〇一四年以降	169

序

作者にとって句集をまとめるということは、それまでの月日を振り返るということだ。ありふれたたとえで言えば、一枚一枚懐かしい写真を見るように、一句一句から追憶の時間が始まる。初めての句集ならなおさらだろう。どんなに拙い句でも、それが作者にとっての真実であるならば、過ぎ去ってしまったはずの時をちゃんととどめていてくれるはずである。

ところが、小林すみれさんの『星のなまへ』は、作者のみならず私にまで、この十年近い月日を振り返らせてしまった。

「木語」終刊、父の死、と独り立ちせざるを得なかった年、初めて講師をさせていただくことになった（JALアカデミー）の講座に、たった一人で飛び込んできたすみれさんと出会ったのだということを、そして、「棕」の句会や旅行で数え切

れないほどの座をともししてきたのだということを、まるで齟齬としての映像を見るように思い出してしまったのである。

おそらく私は、すみれさんの作品に於いて、ことごとくそれが生まれる現場に立ち合ってきたのだ。すみれさんがよく自分のことを「掠育ち」だと語っていたように。それらの作品がもたらしてくれる回想の時間は懐かしく温かく、かけがえのないものであった。

それにしても、共有してきた時間というものがそんなにあったのかしらと、少々意外の感もあったのは、それだけ私の歩みに自分を顧みる余裕がなかった証なのかもしれない。

少しずつ蘇ってきた私の記憶の中に、気がつけばいつも人の輪から抜けだして、無心に野辺の花を摘んでいるようなすみれさんの姿が浮かぶ。

さて、作品に触れてみよう。

はつふゆの匂ひを連れてくる列車
画布にまづ置く早春の波の音

風去りて牡丹大きく立ち上がる

初心の頃の作品。いずれも何かの始まりを感じさせる句だが、五感の瑞々しさ、気質の大らかさを、率直に言葉にすることの出来る人だということがわかる。三句目の観察力を見ると、表現自体にはまだ幼さがあるものの、すでに写生の目が備わっていたのだなと感心する。油絵を描く人なので、写真や省略ということを理解し、俳句に応用することにも初めから抵抗がなかったのだろう。

玄関を大きくあけて盆用意

秋日傘差してこころをゆるしけり

そしてこれらの句になると、俳句らしい、いや俳句でしか出来ない自在な表現を楽しんでいるように感じられて、頼もしいかぎりである。作者は改めて季語というものに向き合い、「もの」に語ってもらおうという恩恵を受けることになったのだ。

マフラーをぐるぐる巻きにして挑む

この句に出合ったときは少なからず衝撃を受けた。作者が素の心で掴み取った新しさ、そして若々しさ。このような句になると、俳句らしさから、作者らしさへ、自画像のような作品と言えるだろう。読者はどんな場面を想像するだろうか。北風に逆らって歩く姿か、小流でも飛び越えようとする場面か。いずれにしてもささやかな挑戦に違いない。思わず読者の頬は緩むのである。

弾丸のやうに駆けこむ町薄暑

この句もそうだ。主体を省略し、一句を単純化し、季節の美しさを絵の具を盛り上げた油彩のように躍動的に描く。

このあたりから作者の個性が作品に滲み始め、目を向ける対象もひろがって俳句の世界が豊かになってくるようである。

べうべうと啼きて銀河の濃くありぬ

これまた省略の妙である。いったい作者は、宇宙のどんな声を聞き取ったのだろうか。

するするとするすると春動きだす

省略に伴うオノマトペの多用は、もしかしたら私譲りなのかもしれない。句集を編むにあたって、その多くを省かなくてはならなかったはずだが、この句は「春動く」という季題の体験そのものを擬態語によって描いていて、作者の受けた印象はほかに言いようがなかっただろうと思う。思わざる表現に驚き、かつ共感する読者が多いのではないか。

春愁や猪のまつげの長きこと
菜の花や雨でもいいと思ひたる
まつさきに五月が好きでありにけり
階段は駆け上がるもの休暇果つ
エメラルドグリーン深く時雨かな
涙にも色のあるべしいぬふぐり
南天の花咲く久しぶりに会ふ

雲行きのあやしくなりて蛇跨ぐ
冬晴のあつたうてきにひとりかな
もう仏子の駅かと思ふ年の暮
秋淋し灯台守のごと淋し
一輪のとてつもなくて福寿草
七月のたけこさんにここにこと
手を取つてくれし男や帰り花
道幅の広き街なりシャーベツト

この作者でなければ詠めないであろう作品を書き抜いてみた。猪のまつげをしげしげと見つめる童心、「雨でもいい」と思う心の柔らかさ……。それに、新年に咲いた福寿草の花の大きさ、光を跳ね返すあの黄金色を「とてつもなくて」と、手放しの一言で言い止めてしまうとは。

つくづくこの人の真似など出来っこないと思う。

なお、「仏子」は西武池袋線の駅名で、すみれさんは毎月「海雀の会」の日には

この電車に乗って、飯能の駅で降り、名栗のわが家へ通ってきてくれる。年を追って句会の顔ぶれは少し変わったが、続けられる限り続けたい句会だ。

バレンタインデー父を上げます日となりぬ

今すみれさんの御父様はお一人で暮らしていらつしやるのだろうか。御母様を突然亡くされたとき、哀しみを乗り越えようとすみれさんは休まず俳句を詠み続けた。そして、俳句があつてよかったと言いつつ切った。すみれさんはまだ知らないだろう。その言葉が私にとって、「棕」の句会を続ける原動力にもなっていることを。

たちねの声わすれめや桃の花

俳句は、俳句を愛する人を限りなく癒やしてくれる。

私はこれからも、すみれさんの俳句が生まれる現場に立ち合っていたいと願う。

二〇一五年夢見月

山雀亭 石田郷子

序・石田郷子

I	二〇〇五年～二〇〇七年	13
II	二〇〇八年	35
III	二〇〇九年	57
IV	二〇一〇年	85
V	二〇一一年	107
VI	二〇一二年	123
VII	二〇一三年	145
VIII	二〇一四年以降	169

句集 星のなまへ

I

二〇〇五年～二〇〇七年